

「遺伝子と日常の病気」

京都府立医科大学教授・衛生学 阿部 達生

東京医科歯科大学・第1内科

水 島 昇

本書は染色体分染法などの古典的な遺伝学から、まさに最新の分子遺伝学にいたるまでの広い範囲をカバーしたものである。

分子レベルの話となると、私たちはしばしば視野が狭くなり、1つの遺伝子は1つの染色体の一部であること、そして相同染色体には対立遺伝子がもう1つあることを忘れてしまいがちである。しかし、本書では、染色体レベルの視点と、よりミクロな視点が巧みに織りまぜられているため、鳥瞰的な視野を持って遺伝学に接することができる。遺伝子クローニングやPCR法などの新しいテクニックについても一通りの説明がされており、図も多く用いられているため、直接実験に携わったことの

ない者にとっても十分内容を追えるであろう。

内容としては主にRFLPを用いた連鎖解析を中心に話が進められており、現在でもその重要性が衰えていないことがうかがえる。第5章では、30億個にもおよぶ塩基対の中から疾患の原因遺伝子を明らかにする過程に触れている。この追究は現代の技術をもってすれば簡単なように思えるが、実際は意外に困難であることが理解される。特に、Huntington 舞蹈病と嚢胞性線維症については詳細に記載されている。これらの話では、単に科学的な内容にとどまらず、それにまつわるドラマも描かれており、読み物としてとても面白いものとなっている。

一方、本の題名にもなっている“日常の病気”の状況は残念ながらより厳しいようであり、糖尿病などのごく限られた疾患について紹介されているのみである。しかし、他の章で触れられている癌も、もはや“日常の病気”とみなすことも可能であり、遺伝学の知識は病気の理解に必須であろう。また、最後の章で取り上げられている遺伝子治療もこれからの大きなトピックスとなるのも間違いない。生命科学や医療関連領域に携わる者にとって、急速に発展する遺伝学を整理するのにこの本はとても有益なものになると思われる。

● A5 頁370 図92 写真42 1994
定価 5,150 円(税込) 千400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)